

序章 「気」の発見によって見えてきたもの

歴史上で確実に存在した「気」

今、私は日本の歴史上の財産とも言える伝統文化について、また日本の教育システムについて、もう一度考え直す必要があるのではないかと考えています。江戸時代には携帯電話やテレビ、パソコンや自動車、ジェット機などの技術はありませんでした。しかし今はそれが当たり前のようにあります。そして現在もこれらの技術の進歩はますます加速しとどまるどころを知りません。一方、これに対し私たちは一人ひとりの人間力においては、平和な江戸時代や激動の幕末、そして明治維新といった改革を伴った新しい夜明けの時代に比して、今や国の次元も、私たち一人ひとりのエネルギーも低下し、人間としての大事な何かが失われてしまっているように思われます。

この度の2011年3月11日の東日本大震災による福島原発事故では、原発の安全神話の中身がいかに「原子力ムラ」と呼ばれる閉鎖的集団の嘘と虚構で塗り固められたものであったかが露呈しましたが、ここにおいても人間力の低下は誰の目にも明らかです。またお年寄りをだます若者の「おれおれ詐欺」や親による幼児虐待の激増など、明らかに日本の何かがおかしくなってきました。まさにその要因の根底にあるものこそ、人間としての「心なし」ということではないでしょうか。それはここに至るまでの環境、教育を含め、何かが大きくゆがんできた証あかしとも言えます。

私たちが少なくとも義務教育として過ごす小・中学校の6年間、さらに今では当たり前となった高校の3年間を合わせて9年間、果たしてそこに真の教育があったと言えるでしょうか。そこには「教

え育む」という教育の本質よりも受験や知識詰め込みの教育が最優先されてきた実態があります。

たとえば、ちよつと昔にあつて今にない現実として、かつてはどんな子どもでも小刀こがたなを使って鉛筆を削ったり竹とんぼを作ったりしていましたが、そこには道具を使い、物を作ることの楽しさを知ったり、あるいは小刀で怪我をして痛みを知ったりしながら、生身の人間というものを知る良き機会となっていたはずです。そうした身体を通して人間の感性を高める、日本の古き良き学びの場が奪われてしまっています。

それは重要な歴史財産とも言える日本伝統文化などの継承においても同様で、今やその価値が見失われ、継承者が減るなどの現状は残念なことであります。また一方で、伝統文化の筆頭とも言える武道においては、流儀や型こそ継承され、流祖の伝説や技も伝書として残されてはいるものの、その実態においては、今やその本質は失われ、平和な時代に即していつの間にかスポーツ化され、競技試合主体の傾向が強くなっているように思われます。その結果、武道の本質である武術としての術技や心のあり方といったものが過去に置き去りにされてしまっているように思います。

本来日本における武道というものは、国の歴史の根幹をなす文化であります。だからこそ、その時代に生きた人間力のエネルギーをそこに見出し、その本質を不易ふえき流行として活用していくことにはたいへん大きな意味があります。

たとえば江戸時代の柳生石舟斎、伊藤一刀斎、そして明治にかけて大活躍した山岡鉄舟ら剣聖たちが開眼した無刀流の極意には、武術としての術技のなかに、今には考えられないような人間のエネルギー

ギーはもちろん、人としての根幹をなす忠義などを論ず多くの教えがあります。それは知識としてではなく実践としての、すなわち身体的、精神的悟りとしての教えです。

しかし、それら究極とされる極意をいくら文献で学んだり真似たりしても意味がありません。その本質にある実態を「再現」できて初めてその価値と真の意味はわかるからです。同時にその本質が「今」という現在に不易流行として活かされるからこそ、歴史においてもぶれない国としての基本路線ができていくのではないのでしょうか。そしてそれはその時代の進化を加味しながら重要な歴史文化として次世代に継承されていくものだと思います。

私がこのような考えに至ったのは、日本文化に根付いている「氣」という言葉の裏にあるエネルギーの実態に気づいたからです。それはまさに「氣」という言葉そのものにあるエネルギーで、具体的には相手を無力化したり、相手を重くしたり軽くしたりするなどの、常識では考えられないことを実践可能にするエネルギーです。このようなエネルギー・術技は、江戸時代に存在した無刀流という剣の極意と照らし合わせて見ると、「氣」は武術の極意に位置するものであることがわかります。そのことはさらに、現在においては人間の潜在能力の発掘という、今に最も必要とされるエネルギーとして重要な意味をもつこともわかります。そして、現在私は「氣」によって、自分と同じことを第三者の誰に対しても同時かつ瞬時にやらせることによって、その人自身のもつ潜在能力のすごさに気づかせる指導を行なっています。

常識では考えられないこうした数々の「不可能を一瞬にして可能にする事例及び事象」は、これまでの検証において「客観性、普遍性、再現性」の三つの条件を同時に満たすものであり、このことは少なくともその事象や事例に、ある一定の法則が内在していることを示すものであります。それらの法則を基本とし、「氣」というエネルギーをさらにあらゆる角度から検証を重ねれば重ねるほど、次から次へと新しい発見があります。現在の科学的常套手段じょうそうしゅんにもなっていない「分析的手法」とは違う「統合的手法」ですから、その時々々の発見は即実践につながるいき、またそれが即活かされるという即効性があり、ここに「氣」のエネルギーの重要な意味合いがあると言えます。

人間に大きな変革をもたらす「氣」

「氣」によって潜在能力に気づかせる方法のもう一つ重要な点は、「不可能と思われていたことを、瞬時に誰に対しても可能にさせることができる」というエネルギーの伝達が、一人に限るのではなく10人でも100人でもその対象人数に制限なくできるということにあります。そしてその事実、人間というのは「氣」というエネルギーを受け取る共通した何かをもつ存在であることを示唆しているということです。

「氣」そのものは実際に見ることも感じることもできませんが、不可能が可能となる具体的な変化によって、その変化を起こさせる何らかのエネルギーの存在が屈屈抜きにわかります。それ故に体験

した人は、その自分自身の変化によって「目に見えないエネルギー変化が確実に体内で起きている」ことを自覚せざるを得ないわけです。したがって、はじめは自問自答が出てきます。これは未知の体験ですから当然のことだと言えます。しかしそこからの進展においては、偏差値の高い人ほど自分の変化を認めることができず、自分の範疇はんちゆうにある理屈で自問自答をするので、結局、疑心暗鬼に陥り、進化への時間を自らストップさせてしまっています。

これに対し多くの人たちは、たとえば「投げ」という技においては、相手を投げようとする、その力と投げられまいとする力が衝突して投げられないのが普通ですが、「気」によってすんなり投げられることを実際に体験することによって、「急に相手の力とぶつからなくなって投げることができた」「お互いの衝突がなくなった」などと証言しています。まさにこの実体験による自覚を通じて、目に見えない「気」とはそういった変化を起こすエネルギーであることへの気づきが同時に実証されるわけです。

「気」という言葉は様々なところで使われていますが、ここで実現している「気」は、私の知る限りその質、内容において従来のものとは大きく異なるものであり、言わば新しいエネルギーと位置づけられたほうが適切であると思っています。すなわち、宇宙は未だに95%が未知の世界と言われていますが、その未知の世界に存在しているエネルギーの一種ではないかと考えているのです。同時にそれは「人間にはもともとそのような力がある」ことへの気づき、教えにもつながっています。そしてそこには人間がいかなる時代にあっても進化し続けられるという宇宙からのメッセージが隠されているようにも思います。

大事なことは、「気」というエネルギーが単に武術の技への応用という世界に限られるのではなく、人間の存在意義、すなわち「自分は生きている」という自己中心的なものの見方、考え方から、実は自分ももっと大きな世界の共存共栄のなかで「生かされている」ことへの気づきをうながすものであり、さらにそれは人間の潜在能力の発掘への大きな原動力となつて、一人ひとりの活力につながっていくという点にあります。これが本書の一番重要なテーマであります。

またこのような「気」の存在によって今まで気づかなかつたことや、見えていなかったことへの発見、発掘も同時進行で可能となりました。拙著『子どもにできて 大人にできないこと』でも詳しく述べていますが、「大人ができないのに子どもができる」という一般常識では考えられない力が子どもにはあるという発見です。

たとえば、左右6名ずつ大人12名ががっちり組んだスクラムを押して崩すという検証で、アメフト選手やボディービルダーなどの力自慢がどんなに力いっぱい押ししてもまったく崩すことができなかつたのを、わずか2歳の子どもが押しして崩すことができているのです。またお腹に子を宿している妊婦さんでも同じことができます(47頁 写真参照)。

従来的一般常識では決して考えられないこのような事実は何を示しているのでしょうか。

このことはまさに、子どもが生まれながらに「完成した存在」であるという一つの事実、事例を示していると言えます。すなわち、人間はもともとそのような力をもっているという証にほかなりません。

同時に「子どもにできて大人にできない」という事実の裏には、子どもが大人になっていく過程で「できていたことが、できなくなってしまう」何らかの後天的要因が働いているということです。同時にこのことは、そのような現実に気づいていない現在の科学、教育に大きな課題があることをも示すものであります。

今まで数多くの幼児、小・中・高・大学生、一般、あらゆるジャンルのプロ選手などを指導してきて、まさにその要因の本質は、このような深い真実が見抜けないまま、浅い上辺のところにとどまっていた現在の教育や社会環境のあり方にあると確信するに至りました。すなわち、本来は生命体として「統一体」である人間を、分析主体の科学によってわざわざ各部に分けて「部分体」化するという今日の科学環境や教育に大きな責任があると考えています。またそうした状況は、マスコミやメディアによってさらに助長されているところにも大きな課題があると思っています。

「気」は希望ある未来への道づくり

「今」という現在は、過去の積み重ねの結果であり、また未来は「今」という時間の積み重ねの上にあります。つまり明日というのは「今」が変わらなければ明日もその先も変わらないということです。だからこそ、現時点での「今」をしつかり現状分析し、「今を変化させ」、そして「今をしつかり生きる」ことで「今が動き」出し、未来の希望がまさに「今につくられる」ということだと思えます。

以上のようなことに気づいてもらうために、宇城塾（空手実践塾・宇城道塾）では、「気」による「不可能から可能」への実践体験指導を展開しています。すなわち各自が人間としてあるべき身体である「統一体」を取り戻し、本来の人間の能力を發揮していくという取り組みです。

そこにおいては誰もが自分の身体に気が通ることによって、あらゆる不可能が可能となる実践体験をしてもらうわけですが、体験する前に映像（DVD『人間の潜在能力・気』）を観た時は、「やらせではないのか」「暗示ではないのか」というような疑心暗鬼が少なからずあったと受講生は述べています。

しかし実際に目の前で見る、あるいは自分で体験することによって、その疑心暗鬼はすっかり消え去ってしまっています。初めての体験では「不思議でしょうがない」という驚きから、やがて回を重ねるごとに「人間というのはすごい！」という認識に変化していきます。それは同時に人間としての自分を信じられるという「自信」につながっていきます。それは「試合で勝ったから」などの相対的自信ではなく、「自分のなかに眠っていた潜在能力に気づく」という絶対的自信です。そこから人間本来の潜在能力を取り戻す第一歩が始まります。

「進歩成長とは変化することである。

変化するとは深さを知ることである。

深さを知るとは謙虚になることである。」

このプロセスを通して究極、「自分こそが謙虚にならなければならない」ことに気づいていくというものです。

まずは周りではなく、「自分が変わらなければ駄目なのだ」ということに気づいていく——それが「一人革命」の気づきです。すなわち進歩成長の第一歩です。この境地に至って初めて、「心あり」の修行が始まるとも言えます。

現在の、権威や肩書きや知名度が優先される社会のあり方、受験に重きが置かれる知識偏重の教育のあり方、プロセスより目先の勝敗を最重視するスポーツのあり方、視聴率を最重視するメディアのあり方、選挙で生き残ることばかりを最重視し、自らを犠牲にして日本の幸せを考えようとする政治家のあり方など、まさに日本の「今」は課題だらけです。

では、どうしたらよいのか——。その答えは一つ。

「心を取り戻すこと。」

すなわち、「心あり」の身体にすることです。頭で考えた虚の「心あり」ではなく、実体として魂に刻み込まれた「心あり」です。

そのことによって身体は部分体から統一体となり、統一体になることによって「気」が流れ、そこ

から生み出されるエネルギーによって、本来あるべき自分自身の人間力を復活させていくことにあります。まさにそこには明るい未来への希望が見えてきます。

本書では、そのメカニズムと実践・検証について、さらに私たち一人ひとりに備わっている潜在能力及び「気」の可能性についても、触れていきたいと思います。

2012年5月吉日

宇城憲治

第一章 「気」の国、日本は何処へ——知識偏重と心の喪失がもたらしたもの



中学生・高校生・大学生・社会人を対象とした著者の講習会
2日間で1000名以上が参加した(2012年1月 奈良県立桜井高校)

知識偏重の教育がもたらしたもの

私はここ数年、中学生、高校生、大学生、教員、保護者、一般社会人、約1000名を対象とした、人間の潜在能力のすごさに気づいてもらう実践体験講習を行なっていますが、講習会時の様子からはもちろんのこと、講習会後に提出される感想文からも、世代による、ある歴然とした大きな違いが確認できています。

具体的な例をあげると、たとえば実践例の一つに、左右4名ずつ大人8名ががちり組んだスクラムを押して倒すという検証があります。100キロは超すと思われるスポーツ部の大学生にやらせてみたところ、まったく崩すことができません。ここで私が簡単に倒してみせます。そして次に同じことを女子中学生にやらせてみます。当然まったく動かすことができません。しかし私の指導の特徴でもある、第三者に「気」を送って自分と同じことをやらせるという方法で再度女子中学生にやらせてみると、いとも簡単に崩すことができました。

この検証は大学生↓私↓中学生と交互に代わる代わる数名によって行ないましたが、すべて同じ結果でした。100キロはあるスポーツ部の大学生ができないのに、63歳の私ができ、また女子中学生が「気」によって「できる」という事実。この力の差、つまりそのエネルギーの本質は一体何でしょうか。またここでたいへん興味深いことがわかりました。それは、この検証に対する、中学生、高校生、

大学生のそれぞれの受け取り方や感じ方が異なるということです。

左記は、2012年1月に奈良県立桜井高校で実技指導した時の受講生の感想文で、平均的な内容のものを抜粋したものです。

〈中学生の感想〉

● はじめ自分の力でやった時はびくともしなかつたのに、先生に気を通してもらうとすぐに倒すことができ、すごくびっくりしました。あらためて気の力ってすごいなって実感しました。

● 大人8人など自分の力でなんて絶対に倒せないと思っていたのに、気を通してもらうと倒せたので、ほんとにすごいなと思いました。倒せてとても嬉しかったです。